

# 2023年度 第3回 施設一体型小中一貫教育校設置研究会

二宮町の小中学校における喫緊の課題と

施設一体型小中一貫教育校の意義

## 第2回研究会で出された 二宮町の小中学校における喫緊の課題

- 1 不登校・学校に行きづらい児童生徒の居場所
- 2 小規模化
- 3 学校設備（プール、トイレ）の課題
- 4 地域参加に関わる課題
- 5 小中一貫教育に関わる課題
- 6 登下校に関わる課題
- 7 その他

課題解決の目的

# めざす子ども像に沿って 一人も取り残さない二宮の学校教育をつくるため

## めざす子ども像

- 自分の心と身体にまっすぐに向き合い、自分の良さを発揮し、自己実現できる子ども
- 多様な価値観を大切にし、互いの良さを引き出しあい、主体的に他者と協働できる子ども
- 二宮に愛着を持ち、社会に貢献できる子ども

## 「喫緊の課題」とは

「今」と「将来の」二宮の子どもたちのために

- 早急に解決しなければならない課題
- 将来のために、早急に対応しなければならない課題

# めざす子ども像と不登校児童生徒の増加

「学校がすべて」ではないが

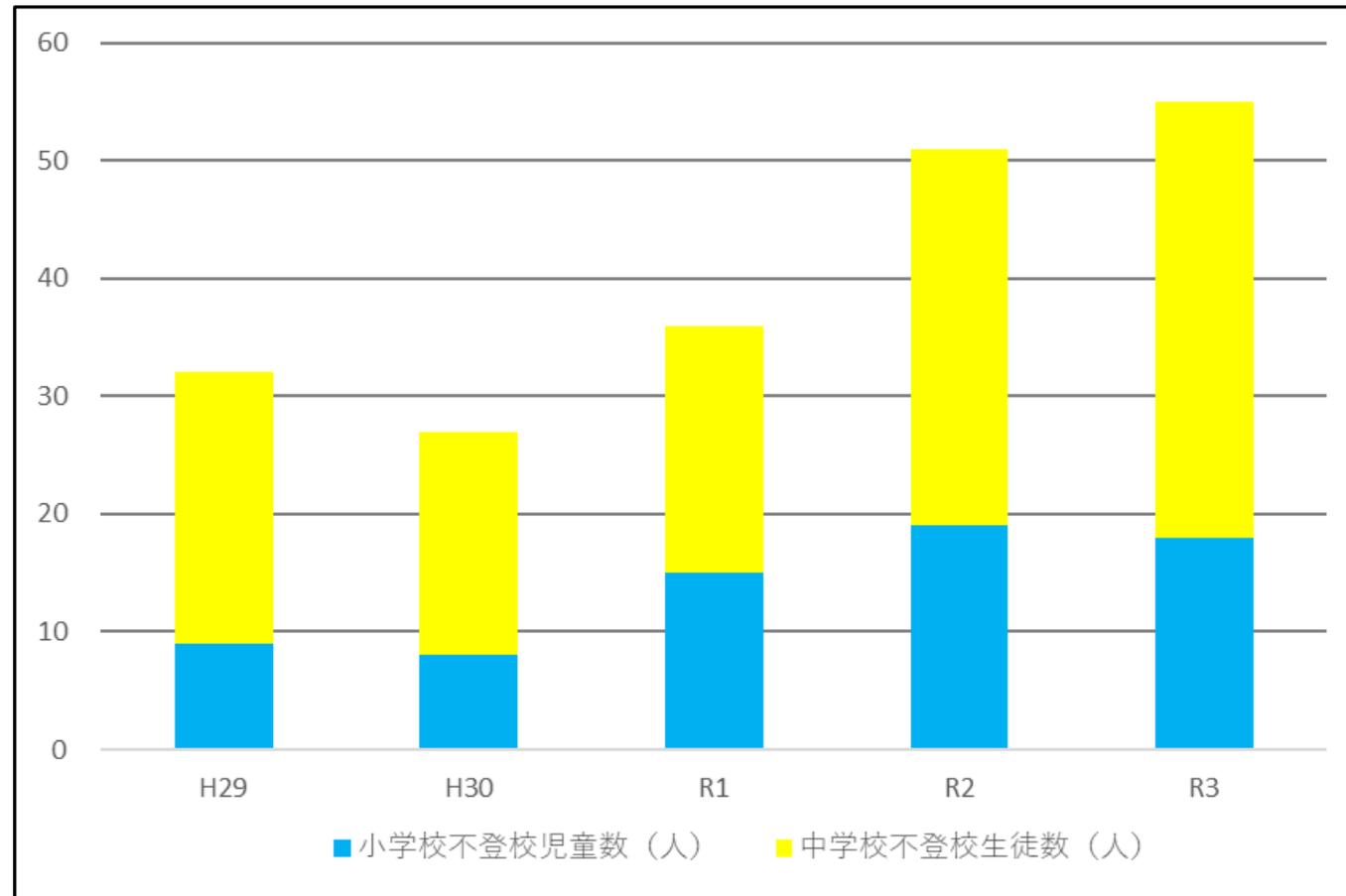
- 学校に行かれない、教室に入れない状況にあって、学びの機会を十分に持てない子どもたちもいる。
- 不登校の増加は、学びの場を持たない子どもたちが二宮でも増加している、ということ
- 現状では、学校以外の学びの場は学力や進路、多様な体験、豊かな人間関係の構築などの保障が得られにくい。

## 二宮町の不登校児童生徒数の推移

不登校児童生徒数の推移					
年度	H29	H30	R1	R2	R3
小学校不登校児童数（人）	9	8	15	19	18
中学校不登校生徒数（人）	23	19	21	32	37
小中学校合計（人）	32	27	36	51	55

※不登校児童生徒数は、問題行動・不登校調査に基づく数値であり、病気、経済的理由、その他（家庭方針等）は除く。

# 不登校児童生徒数の推移 二宮町



# 児童生徒数減少の中で増えている不登校の子どもたち

- 最初から不登校を選択したのではなく、二宮の小中学校に入学したのに行かない、行きづらい
- 個別の理由や背景がある・・・不登校に関する資料 第2回 資料2 参照
- 学校はすべてではなく、選択肢の一つではあるが学校以外の学びの場は限られている
- 学校以外では経験の積み重ねや学力保障が得にくい・・・本人、保護者の不安、心配につながっている
- フリースクールは学校の出席扱いにならない
- 行き渋り、不登校は家族の生活にも影響を及ぼす事例が多い・・・心配が尽きない、子どもの世話で保護者が仕事に就きづらい

---

**学校に行かれない子どもたち**

**不登校にカウントされなくても休みがちの子どもたち**

**登校しても教室に入れない子どもたち**

**それぞれの状態に対応したサポートを**

# 不登校が起こりにくい施設一体型

- 背景に中一ギャップが考えられるケースでは特に成果が見られる
  - ・知っている小学校の先生たちがたくさんいる安心感
  - ・小学校時代から知っている見知っている中学校の先生であることの安心感
  - ・小学校期から中学校の生活や学習の様子が分かっているので先への見通しが持て、不安感が小さくなる
- 中一ギャップ以外の背景や要因のケース
  - ・小学生、中学生の成長特性を教員が理解しやすく、教育課程上のギャップが小さくなる
  - ・小学校期に効果的だった対応を中学校でも継続しやすい。保護者の安心にもつながる。
  - ・小学生期の様子を見たり情報共有をしてきているため、中学校の教員が一人一人に合った対応を取りやすい。また、小・中学校の教員が一緒に対応することができる
  - ・学習のつまづきや空白を長いスパンで、子どもに合ったペースで改善できる

# 不登校対策と施設一体型小中一貫教育校の意義 異年齢集団が非認知能力を育て、高める

- 学校に行きづらい児童生徒は自尊感情が下がっていることが多く、「誰かの役に立った経験」や「年齢に見合った仕事を任される体験プログラム」など、自己有用感を高める取り組みが一定の成果を上げている。施設一体型の異年齢集団では、年齢差のある子ども同士、面倒を見てもらったり見てあげたりする場面、一緒に遊ぶ場面が多く、体験プログラムと同様の意義があり、成果が期待できる。  
多くの施設一体型小中一貫教育を実践している学校、自治体からは、意欲や思いやり、社会性といった「非認知能力」が向上し、登校意欲が高まって不登校が減少していることが報告されている。



## 施設一体型校の設置だけではなく

子どもたちの個別の状況やニーズに沿った学びの場づくりを

# 小規模校とは

留意点 : 小規模校と少人数指導は別のもの

- **小規模校**は1学年の**学級数が少ない学校** 一色小学校：全学年1クラス 二宮西中学校：近い将来全学年2学級
- **少人数指導**は、一人の教師が指導する**子どもたちの人数が少ないこと**  
一人一人の子どもたちに沿った学校教育を進めるためには、少人数指導（一人の教員に対して児童生徒は20名程度）が良く、二宮町は国に対して教員定数の改善を求める意見書を提出することになった。
- 全学年でクラス替えを可能としたり、学習活動の特質に応じて学級を超えた集団を編成したり、同学年に複数教員を配置するためには、1 学年 2 学級以上が望ましく、中学校ですべての授業で教科担任による学習指導を行うためには 1 学年 3 学級以上が望ましい（文部科学省・二宮町小中一貫教育推進計画）

# 小規模校の良さ

- ・人間関係が深まり、仲良くなる
- ・同学年が少ないので異学年との関わりが増える
- ・急な教育活動の変更や入れ替えに自由度が高まり、小回りが利く
- ・学校全体で個々の子どもの情報を共有しやすい
- ・教職員の協力意識が高くなる

# 小規模校の課題

- クラス替えがないため、リフレッシュするタイミングがない
- いじめや学級の間人間関係になじめないなどの課題が起きた時に子どもを救う手立てを講じにくい
- 教師同士の指導方法や指導観、教材観をキャッチボールできない
- 学年運営を1人、またはごく少数で行うので、教育活動がマンネリ化、前年踏襲になりやすい
- 中学校では部活が成立しづらくなる
- 中学校では、一人の教員が2教科を担当することが多くなり、教材研究が負担になり、指導を深めにくくなる
- 教員が多様な学級経営を経験できず、様々な状況への対応能力を身に着けづらい・・経験を積みにくい
- 教員一人一人の担当（校務分掌）数が増える
- 教員の個々の得意分野を活かした適材適所の配置がしづらい

# 小規模化解消における施設一体型小中一貫教育校の意義

施設一体型小中一貫教育校の設置は、学校の統廃合が伴う

小規模化の解消と「3小学校区を残す」こととの整合性をどうするか？